

## 6 施設・設備

### 1 施設・設備の現状・整備状況

#### (1) 医学部・同附属病院移転整備計画

長年の懸案であり、悲願でもあった医学部・同附属病院の移転整備については、昭和 62 年 5 月に医学部教授会・附属病院科長会議において、統合移転を基本構想とする「岐阜大学医学部・同附属病院長期計画」が承認され、平成 4 年 9 月第 35 回将来計画委員会において、医学部・同附属病院整備検討専門委員会が取りまとめた「岐阜大学医学部・同附属病院の整備について」の最終報告書が承認され、第 655 回評議会において、上記最終報告書が承認された。

その後、平成 8 年 8 月に文部省の了解を得て、平成 10 年 4 月本学、岐阜県、岐阜市、岐阜市土地開発公社の 4 者による「岐阜大学医学部・同附属病院及び医療技術短期大学の移転に関する覚書」を取り交わし、医学部・同附属病院の移転整備計画が具体化した。

このように、移転整備は非常に長い歴史と多くの人々のたゆまない努力により実現の運びとなったところである。

そこで、移転整備に向けては、21 世紀の教育・研究・診療に対応できうる医学部及び附属病院を目指し、次のような基本理念をかかげている。

まず、学部教育は 6 年一貫教育・テュートリアル教育の充実、CCS（臨床教育）化・模擬患者の導入、入試の多様化の推進、学外医師受入促進、スーパーローテイトの導入、さらに、大学院教育は、柔軟な教育研究体制の確立、高度専門職業人の養成、社会人特別選抜（昼夜開講制）の導入、受託実習生・病院研修生の受入促進を図るなど、時代が求める医療人の養成に努めることとしている。

病院診療については、プライマリケアを中心とする全人的医療の展開を促進し、その中で外来診療は、臓器別診療体制の確立、地域医療との連携、予約センターの設置、専門医療と総合診療部との有機的連携、入院診療は、インフォームドコンセントの徹底、臓器別病棟の導入、中央診療部門は、総合診療部と救急部・専門外来の連携強化、ICU・HCU・CCU の充実、デイサージャリーの体制確立を図り全人的医療と専門医療の融合を促進し、患者に応える診療システムを構築する。

移転計画は、平成 16 年 6 月 1 日から新学部及び新病院での授業開始並びに開院を目指して準備を進めているところである。

移転場所は、岐阜大学柳戸団地西隣で敷地面積は約 124,000 m<sup>2</sup>、敷地の形状は東西約 250m、南北約 500m と南北に長い長方形となっている。

配置計画は、中央北よりに病院建物、南よりに医学部建物を配置し、建物の北・南に駐車場を配置した。

医学部の建物は、医師・医学者の育成のための新しい教育・高度な研究に必要な環境とアカデミックな雰囲気となるよう、また、医学的知識・技術の習得のみならず、総合的・全人的教育の場となるよう計画され、次のような特色を有している。

教育・福利棟は、閑静な屋外交渉空間であるホスピタルパークに面して設け、人とのコミュニケーションを通じ医療人としての人間性を養えるよう福利施設も取り込んだ複合施設として整備する予定である。

医学部本館は、高度化・多様化する教育・研究に対応できるよう、平面計画は 4 つのブロックで構成した大部屋方式とし、設備計画においても将来の拡充・変化及び発展にも柔軟に対応でき

る計画とした。

医学部各施設へは移動しやすいように、デッキ状の連絡通路(インテリジェントモール)を設け、臨床研究部門はできる限り病棟に近接させ、病棟との渡り廊下を介してより連続性を確保した。

医学部本館各階にリフレッシュスペースを配置し、ゆとりと潤いのある空間を積極的に取り入れ、研究室と廊下の間仕切壁をすりガラスとすることで開放的な中廊下とした。

一方新病院の特徴は、

阪神大震災クラスの大地震でも耐えうる免震構造 9 階建てで、中央診療部門、外来部門などを 3 階までのフロア毎に集約配置し、その上に病棟を積み上げる複合型で、少ない階層移動で受付から会計まで済ませることができるように、患者動線が極めて単純化・短縮化されている。

迅速かつ的確で効率的な治療を行なう観点から、手術室、集中治療部、重症病床を 3 階フロアに集約した。

患者サービスの点では、外来は 2 階フロアに集約し、動線が水平移動となる臓器別外来であること。また、病棟は十分な居住空間を確保した病室で分散方式で各病室にトイレを導入したことが特筆される。

ソフト面では、新病院の最大の特色である、電子カルテ、フィルムレス、ペーパーレス化等国立大学附属病院としては初めてのトータルインテリジェントホスピタルである。また、設備についても最先端の医療機器を導入し、開院と同時に安全で最良の診断、治療を迅速に受けられる。

専門性に富みかつ幅広い診療能力を持つプライマリ・ケアも担当できる医師の教育と育成、並びに優れた看護師の育成、薬剤師、パラメディカルスタッフの教育のできる環境の提供を基本的構造に組み込んだ病院である。

なお、平成 16 年 6 月の医学部・同附属病院の同時移転後、解剖実習施設、動物実験施設、RI 施設については、1 年遅れの移転となるが、鋭意取り組んでいるところである。

## 2 施設・設備の安全性の確保

---

現有の医療機器の中には、設置後 10 年以上使用したものがあり、劣化による故障に対応できないものがある。

また、近年の医療技術の向上は極めて著しいものがあり、最新の医療機器が日々開発されており、地域の中核の医療機関として、最新の医療機器を整備し、地域の要望に応える必要がある。

施設面においては、長年経過した建物も多く、また、医学部・同附属病院は現有施設が狭隘で、教育、研究及び診療について将来的な発展が望めないため、柳戸地区隣接地への移転整備に向けて大学一丸となって鋭意取り組んでいるところである。